

両想いの幼馴染みが
ヌードモデルを
してくれる

Full color 40page
illustrationbook

緒方亭



時系列と既刊の紹介

向井沙奈美
誕生日2月4日
T156 B91 W58 H87

絵師になりたい主人公(ボク)のために
一肌(全裸)脱ぐ幼馴染みの女の子。主人公のことが好き。
ヌードグッズサン会などで女性の体を見慣れているはずの
主人公はふとしたことで彼女のことが好きになってしまう...

絵師に
なりたく
一肌脱ぐ
幼馴染み

幼馴染みと
夏の思い出

幼馴染みが間違っ
てヌードモデルを
してしまう

本作

pixivbooth、各種ダウンロードサイトなどで
販売中→「緒方亭」で検索

（いつもよりも念入りに
洗ってしまった…）





(どうしよう……)

「ねえ今度はわたしの部屋でヌードモデルになってあげる」

「その日は朝まで誰もいないの」



(勢いで
あんなことを
言っちゃった
けど……)

(念のために
準備もして
あるけど……)



(今夜は本当に
誰もいない……)



もうすぐ
彼が来る……

じゅん……

本当に
どうしよう……

招き入れられるがまま
ボクは彼女の部屋に入った

「沙奈美の部屋に入るのは久しぶり…」

ありきたりの感想で緊張を
ごまかそうとしたボクは言葉に詰まった

「な…なんで
競泳水着なんだ!？」

「えへへ…いらつしやい」

「た……たまにはこういうのも
良いでしょ？」

「あ……ああ……」

彼女の様子が少しおかしい

「と……とりあえず
こんな感じで……
キミは腋が好きだったでしょ？」

「あ……あのさ……沙奈美」

「こ……こういうポーズも
いいんじゃないかな」

「ま……前みたいにな水をかけてもいいよ
ほら……水着だし……」

（人をなんだと思ってるんだ？）

「あつ変なところにはかけないでね
あの時は本当に
ドキドキしたんだから」

ボクには彼女が裸に
なるのをためらって
いるように見えた

何かあったのだろうか

『こういうのも
どうかな? えへへ』

今度は必要以上にはしゃぐ彼女

沙奈美は本当に奇麗になった

噂では彼女の所属する
水泳部のキャプテンに
告白されたらしい

インターハイ出場の
筋肉隆々の好男子でボクとは
月とミジンコほどの差がある

「あのさ沙奈美
……………」

「なに?」



「やっぱりボクは沙奈美の裸が見たい」

もう沙奈美に対して嘘や見栄をはるのをやめた

「……じゃあさ……」

髪をほどき近づいてくる
彼女

サァ……



「キミがわたしを脱がせてくれる？」



彼女からの提案にボクはあらがう術もなく
言われるがままに水着をゆつくり下ろす

素肌には触れないように
細心の注意を払っていたが
ほんの少し触れるたび
彼女は怯えるように震えた

西日にあてられたせいか
彼女の息遣いが荒く汗ばんでいるように見えた



更に水着をおろすと彼女の秘部が
あらわになる

彼女の素肌が艶めかしく潤って見えるのは
きっと西日のせいだろう

(ねえ……気づいてる?)

(いつもよりもずっと
ドキドキしているんだよ……)

水着を脱がせて見上げると
彼女は一糸まとわぬ姿でいつものように
笑っていた

『えへへ……全部脱がされちゃったね』





ボクには絵師になりたい
ボクのためにヌードに
なってくれる幼馴染みがいる

「知ってる？」

「今度の新作映画に初代のキャラが登場するの」

「本当か？懐かしいなあ」

「今度一緒にいこ？」

「それはちよつと
恥ずかしいかも」

「いいじゃないいこーよ」

「いまでもマジカルライト
もらえるかなあ」

ボクらは日曜朝に

一緒に見たアニメの話など

談笑した

こんな何気ない時間こそが
大事なものに思えたんだ



「ねえ……どうして助けに来てくれたの？」

「なんの話だ？」

「わたしが間違っで大学の美術部にヌードモデルに行つたとき……」

「ああ……あれか」

結果的にはボクが行つても行かなくても同じだったじゃないか」

「いいから答えて」



「沙奈美の裸を誰にも
見られなくなかったからさ」

沙奈美に対しては正直でいよう

ンンン...

キキキ...

(あつ...)



「ね……ねえ……ほんの少し触ってみる？」

「えっ？」

「触った感触が分かればもつといい絵が描けるかも」
(触れて欲しい……)

「ほ……ほんの少しって
どれくらいだ？
また3秒か？」

あまりにも破壊力のある
彼女の言葉に脳がしびれるような
感覚を隠して平静を装う



「さ……30秒くらい？」

も……もつと長くてもいいよ……」

（あなたに触れて欲しい……）

（ボクも沙奈美に触れたい）

「そ……そうだ

ず……ずつとこうして無抵抗で
いてあげる」

「よ……よおし……

その言葉を忘れるなよ……」

（沙奈美に触れたい……）

（触れて欲しい……）

まるで子供のころに

よくやった

くすぐりあいつこを

始めるような

やり取りをしてボクは

沙奈美に近づいた

彼女の体のどこから触るかなど
考えることもなくボクはその豊満な胸から
感触を確かめる

ビクッ

ビクッ

ビクッ

彼女は声にならない吐息を漏らす

あくまでも絵のために彼女に触れているという
ギリギリの自制心から先端に触れることは
避けた

均整の取れた腹筋の感触を確かめる
もうボクにはこの行為が絵のためなのか何なのかー

「はっ……あっ……」

「ん……っ」

彼女はこらえきれないのか
声を漏らす

これは
絵のためのことだと彼女が
言った

彼女の秘部に触れることを
しないで付近の恥骨筋を
丹念に調べた

自分が冷静なのか
そうじゃないのか自分でも
よく分からなくなっていた





背筋から背筋
お尻の感触を夢中で確かめる

いつの間にか彼女と
密着状態になっていた

不意に目が合った
その時――

『わたし
もう我慢したくない……』





気が付けばボクは無我夢中で
彼女を押し倒していた

『……』

『……』

『……』

『……』

しばしの静寂

「ど……どうしたの？」

「い……いや……
さっき脱いだボクの
ズボンのポケットに
準備が……」

「そ……
それなら……」

「わたしも
そこの引き出しに
……」

彼女も
“そのつもり”
だったんだと思うと
さっきまで少し卑屈だった
自分が恥ずかしくなる



彼女の秘部はもうすっかり
濡れていた

彼女は潤んだ瞳で
じっとこちらを見ている

他愛もない約束だった無抵抗のポーズを
守り続ける彼女を途方もなく愛おしく思えた

「あ……」

「んっ……!!」

ゆっくり…
ゆっくりと
彼女の“中”に
挿入していく

2センチか3センチ…
俗な言い方をすれば
“先っちょだけ”入ったその時—

「ま……待つて」

「ご……ごめん……
痛かったか？」

「わたし……
なにも言つてない……」

「そ……そうだった……」

この“先っちょだけ”入った状態で
まだお互い告白もしていないことに気づいた

「それにわたし達……
キスもしてない……」

「た……確かに
……」



「ボクは沙奈美が好きだ」

「えへ…先に
言われちゃった」

「沙奈美は？」

「ずっと前から好きでした」

こうしてボクらは
幼馴染みから

恋人になった



(あっ。。。)

ボクはがつくりと
うなだれた

「どうしたの？」

「ごめん沙奈美……
出てしまった……」

「も……もしかして
わたしのせい？」

「いやそれは断じて違う」

（厳密には沙奈美が
可愛すぎたせいなのだが）

「実を言うと
わたしも……」

ぽつり……

「ん？ なにか
言ったか？」

「んーん
なんでもない」

「その……またでできるように
なつたら教えて
今日は本当に
朝まで誰もいないから」



気が張っていたの
だろうか
彼女は静かに寝息をたてた

ボクの方はとつくに
“もう一回”できる状況に
なっていたが
言いようのない幸福感に
包まれてそのまま
寝てしまった

「おつきろー」
月曜日の朝ですよー」

まばゆい光に目を覚ます
どうやら天国ではないらしい

「簡単だけど朝ご飯を作ったの
食べたら一緒に
学校いきましょう」

「ん……ああ」

「あれ？顔になにか
ついてるよ？
こっち向いてみて」







「今度は
もう少しちゃんとしようね」

やっぱりここは天国かもしれない

緒方亭(緒方てい)関連ページ

(2020年5月現在)

pixiv



Twitter



FANTIA



DL-site



FANZA



とらのあな メロンブックス



「両想いの幼馴染みがヌードモデルをしてくれる」

発行日 2020年5月4日

著者・発行者 緒方てい

mail ogatateitei@gmail.com



ところで沙奈美にはメガネの双子の妹
津奈美がいる

今は事情で遠く離れて住んでいる



ボクはこの津奈美のことを
すっかり忘れていたんだ

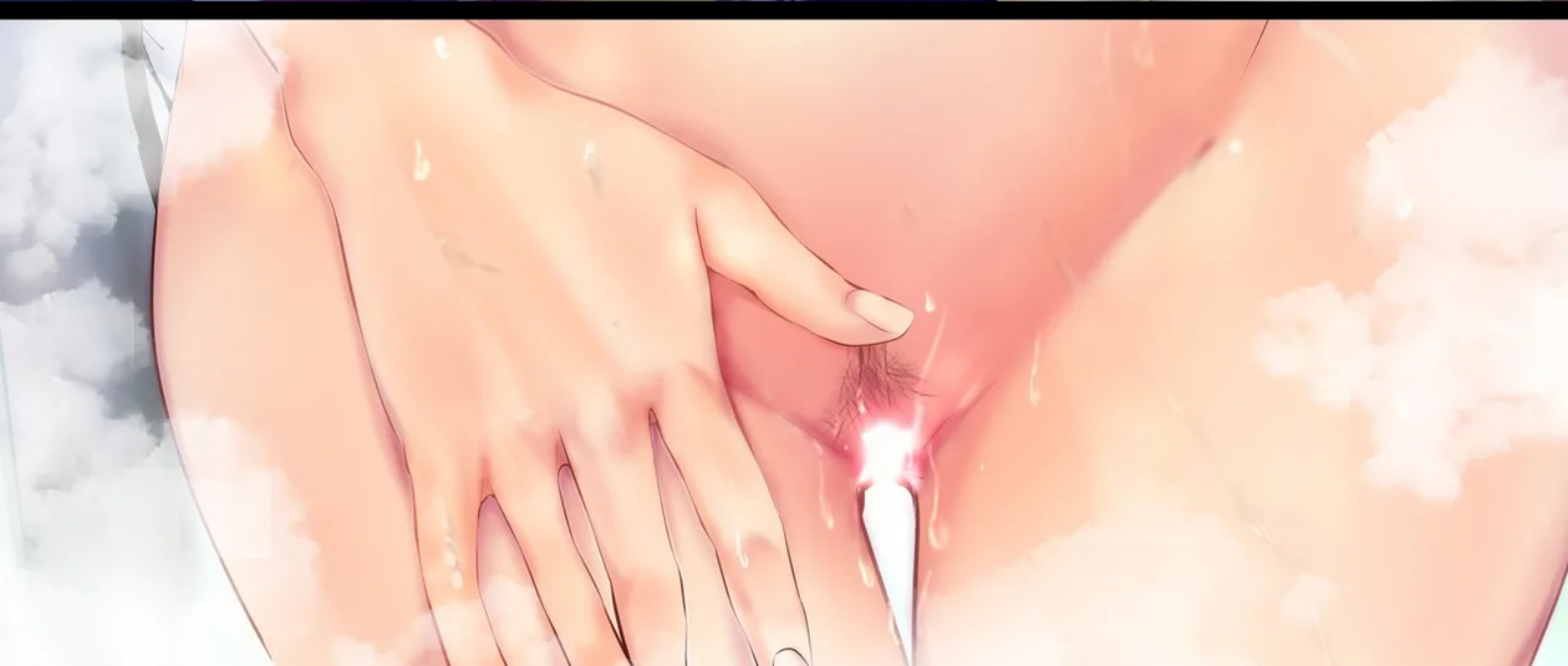


「ずっと前から好きでした」



（いつもよりも念入りに
洗ってしまった…）







(どうしよう……)

「ねえ今度はわたしの部屋で
ヌードモデルになってあげる」

「その日は朝まで誰も
いないの」

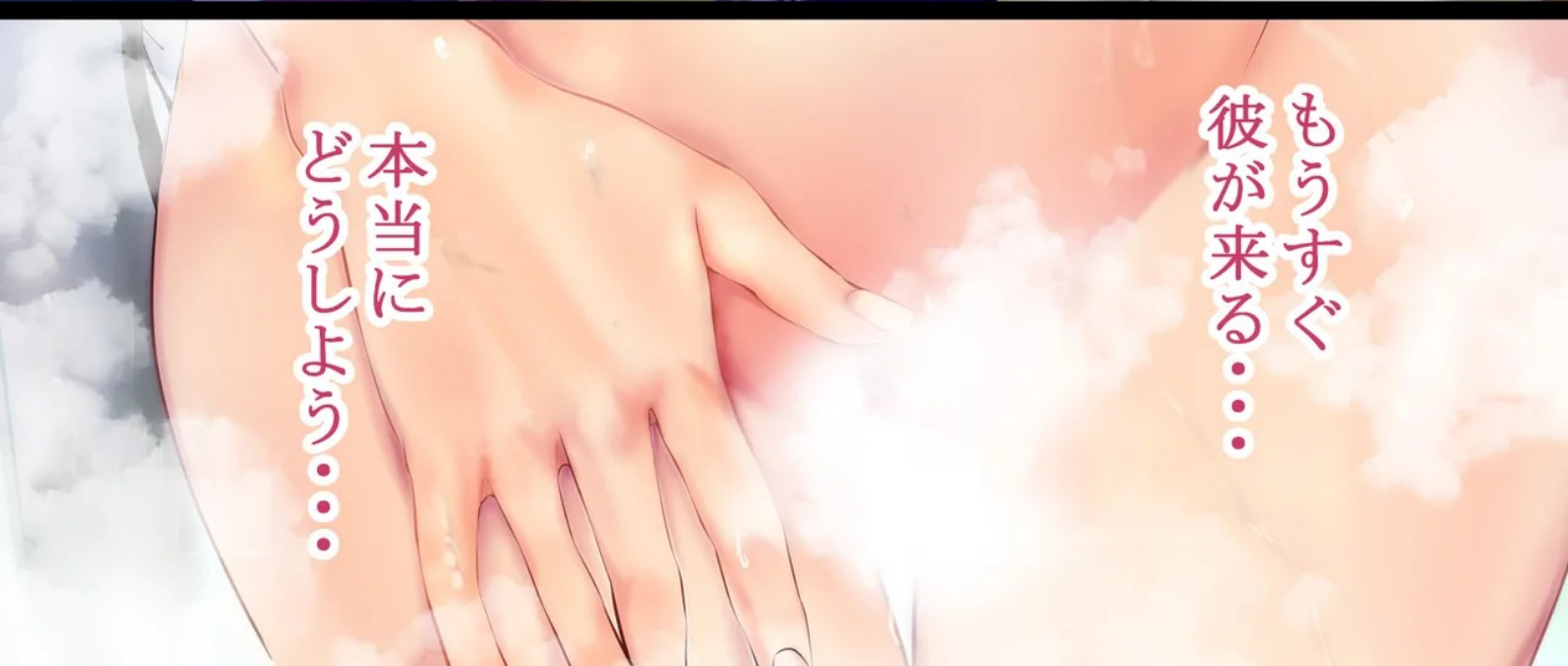


(勢いで
あんなことを
言っちゃった
けど……)

(念のために
準備もして
あるけど……)



(今夜は本当に
誰もいない……)



もうすぐ
彼が来る……

本当に
どうしよう……







招き入れられるがまま
ボクは彼女の部屋に入った

「沙奈美の部屋に入るのは久しぶり……」

「!!」

ありきたりの感想で
緊張をごまかそうとしたボクは
言葉に詰まった







「た……たまにはこういうのも
良いでしょ？」

「あ……ああ……」

彼女の様子が少しおかしい

「と……とりあえず
こんな感じで……
キミは腋が好きだったでしょ？」





「あつ変なところにはかけないでね
あの時は本当に
ドキドキしたんだから」

（だから人をなんだと……
つていうか本当に彼女の“そこ”に
水をかけたのだが）

ボクには彼女が裸を
見せたがつて
いないように見えた
何かあったのだろうか





「こういうのも
どうかな? えへへ」

今度は必要以上にはしゃぐ彼女

沙奈美は本当に奇麗になった

噂では彼女の所属する
水泳部のキャプテンに
告白されたりらしい

インターハイ出場の
筋肉隆々の好男子でボクとは
月とミジンコほどの差がある

「あのさ沙奈美
……………」

「なに?」





「やっぱりボクは沙奈美の裸が見たい」

もう沙奈美に対して嘘や見栄をはるのをやめた

「……じゃあさ……」

ハァ……

髪をほどこいて近づいてくる
彼女





「キミがわたしを脱がせてくれる？」









彼女からの提案にボクはあらがう術もなく
言われるがままに水着をゆっくり下ろす

素肌には触れないように
最新の注意を払っていたが
ほんの少し触れるたび
彼女は怯えるように震えた

西日にあてられたせいか
彼女の息遣いが荒く汗ばんでいるように見えた





更に水着をおろすと彼女の秘部が
あらわになる

彼女の素肌が艶めかしく潤って見えるのは
きっと西日のせいだろう

(ねえ……気づいてる?)

(いつもよりもずっと
ドキドキしているんだよ……)





水着を脱がせて見上げると
彼女は一糸まとわぬ姿でいつものように
笑っていた

「えへへ……全部脱がされちゃったね」



ボクには絵師になりたい
ボクのためにヌードに
なってくれる幼馴染みがいる







「知ってる？」

「今度の新作映画に初代のキャラが登場するの」

「本当か？懐かしいなあ」

「今度一緒にいこ？」

「それはちよつと
恥ずかしいかも」

「いいじゃないいこーよ」

「いまでもマジカルライト
もらえるかなあ」

ボクらは日曜朝に

一緒に見たアニメの話など

談笑した

こんな何気ない時間こそが
大事なものに思えたんだ









「ねえ・・・どうして助けに来てくれたの？」

「なんの話だ？」

「わたしが間違つて大学の美術部に
ヌードモデルに行つたとき・・・」

「ああ・・・あれか

結果的にはボクが行つても行かなくても
同じだったじゃないか」

「いいから答えて」





「沙奈美の裸を誰にも
見られなくなかったからさ」
沙奈美に対しては正直でいよう

キーン...

キーン...

(あ...) (あ...)





「ね……ねえ……ほんの少し触ってみる？」

「えっ？」

「触った感触が分かれればもつといい絵が描けるかも」
(触れて欲しい……)

「ほ……ほんの少しって
どれくらいだ？
また3秒か？」

あまりにも破壊力のある
彼女の言葉に脳がしびれるような
感覚を隠して平静を装う





「さ……30秒くらい？
も……もつと長くてもいいよ……」

（あなたに触れて欲しい……）

（ボクも沙奈美に触れたい）

「そ……そうだ
ず……ずつとこうして無抵抗で
いてあげる」

「よ……よおし……
その言葉を忘れるなよ……」

（沙奈美に触れたい……）

（触れて欲しい……）

まるで子供のころに
よくやった
くすぐりあいつこを
始めるような
やり取りをしてボクは
沙奈美に近づいた



彼女の体のどこから触るかなど
考えることもなくボクはその豊満な胸から
感触を確かめる

ビクッ

ビクッ

ビクッ

彼女は声にならない吐息を漏らす

あくまでも絵のために彼女に触れているという
ギリギリの自制心から先端に触れることは
避けた



均整の取れた腹筋の感触を確かめる
もうボクにはこの行為が絵のためなのか何なのかー

「はっ……あっ……」

「ん……っ」

彼女はこらえきれないのか
声を漏らす

これは
絵のためのことだと彼女が
言った

彼女の秘部に触れることを
しないで付近の恥骨筋を
丹念に調べた

自分が冷静なのか
そうじゃないのか自分でも
よく分からなくなっていた





背筋から背筋
お尻の感触を夢中で確かめる

いつの間にか彼女と
密着状態になっていた

不意に目が合った
その時――





「わたし
もう我慢したくない……」





気が付けばボクは無我夢中で
彼女を押し倒していた

『……』

『……』

『……』

『……』

しばしの静寂





気が付けばボクは無我夢中で
彼女を押し倒していた

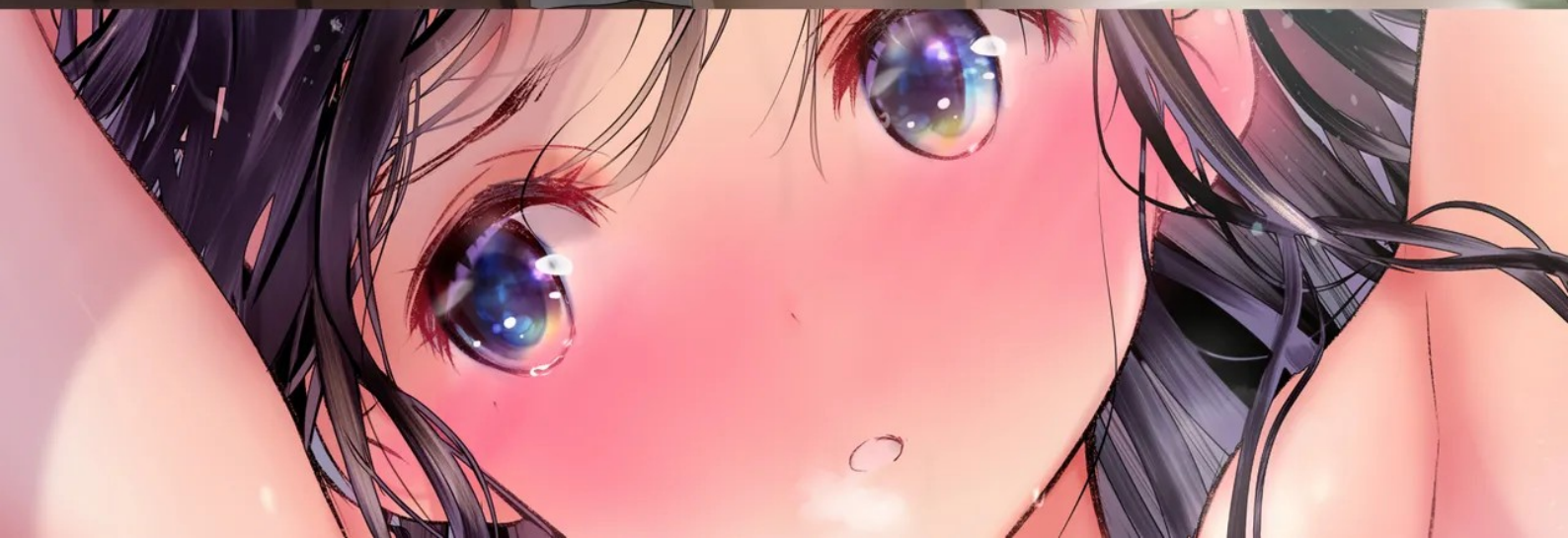
『……………』

『……………』

『……………』

『……………』

しばしの静寂



「ど……どうしたの？」

「い……いや……
さっき脱いだボクの
ズボンのポケットに
準備が……」

「そ……
それなら……」

「わたしも
そこの引き出しに
……」

彼女も
“そのつもり”
だったんだと思うと
さっきまで少し卑屈だった
自分が恥ずかしくなる





彼女の秘部はもうすっかり
濡れていた

彼女は潤んだ瞳で
じっとこちらを見ている

他愛もない約束だった無抵抗のポーズを
守り続ける彼女を途方もなく愛おしく思えた



「あ……」

ゆっくり…
ゆっくりと
彼女の“中”に
挿入していく

「んっ……!!」

2センチか3センチ…
俗な言い方をすれば
“先っちょだけ”入ったその時—



「わたし……
なにも言っていない……」

「そ……そうだった……」

この「先っちょだけ」入った状態で
まだお互い告白も
していないことに気づいた

「それにわたし達……
キスもしてない……」

「た……確かに
……」



「ボクは沙奈美が好きだ」

「えへ。。。先に
言われちゃった」

「沙奈美は？」

「ずっと前から好きでした」





こうしてボクらは
幼馴染みから

恋人になった





(あっ。。。)

ボクはがつくりと
うなだれた

「どうしたの？」

「ごめん沙奈美……
出てしまった……」

「も……もしかして
わたしのせい？」

「いやそれは断じて違う」

（厳密には沙奈美が
可愛すぎたせいなのだが）

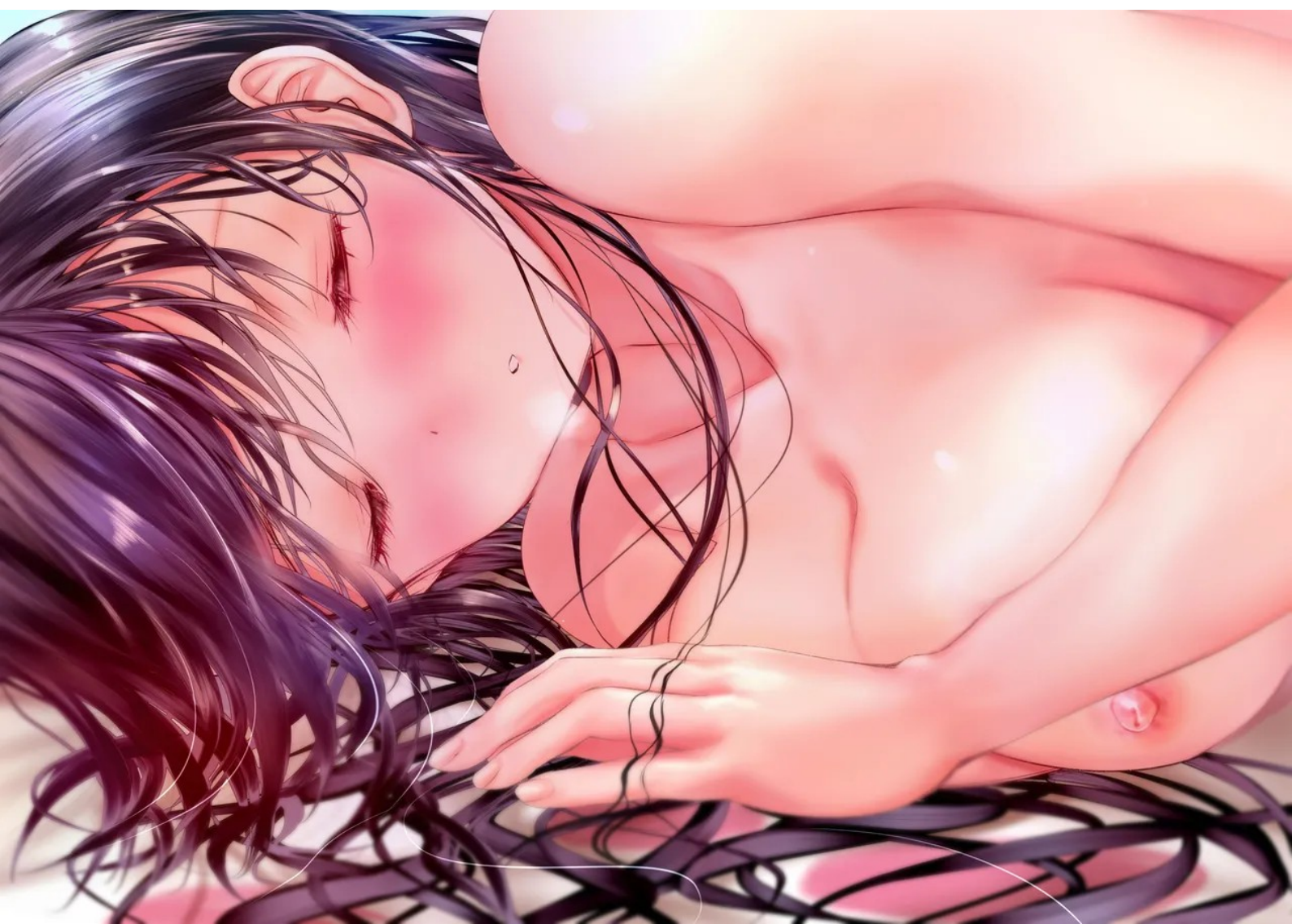
「実を言うと
わたしも……」

ぽっぴり……

「ん？ なにか
言ったか？」

「んーん
なんでもない」

「その……またできるように
なったら教えて
今日は本当に
朝まで誰もいないから」





「おつきろー
月曜日の朝ですよー」

まばゆい光に目を覚ます
どうやら天国ではないらしい

「簡単だけど朝ご飯を作ったの
食べたら一緒に
学校いきましょ」

「ん……ああ」

「あれ？顔になにか
ついてるよ？
こっち向いてみて」





「今度は
もう少しちゃんとしようね」

やっぱりこは天国かもしれない







A full-page illustration of two anime-style twin girls. The girl on the left has long black hair and blue eyes, wearing a pink lace bra and matching panties. The girl on the right has long black hair, blue eyes, and wears glasses, a dark blue lace bra, and matching panties. They are both looking towards the viewer with slight smiles. The background is a soft-focus garden with pink and purple flowers. Vertical Japanese text is on both sides of the girls.

ところで沙奈美にはメガネの双子の妹
津奈美がいる

今は事情で遠く離れて住んでいる





ボクはこの津奈美のことを
すっかり忘れていたんだ

